

# 風のように

甘木教会

主任牧師：崔大凡

牧会委嘱牧師：竹田孝一



わたしは良い羊飼いである。

ヨハネ10：11

## 【説教要旨】

昨年、大阪万博がありました。思い出すのは1970年の大阪万博で、非常に昂揚した気持ちがありました。2005年、愛知にいたとき、開かれた愛知万博を思い出します。前者は、月の石で代表されるように、宇宙までもというまだ前に道があり、先を進めばよいという希望がありました。愛知万博は地球博と呼ばれ地球環境をテーマにしていました。今、地球が進んできた道が二つに分かれている、これまでどおりに道が続くか、それとも人類は滅びるかという象徴で、シベリアの凍土から出たマンモスが飾られていました。それは、これまでの生き方では、マンモスのように環境の変化で滅びたように滅びるかもしれないという、そこからどう解決していくかと言う問うた博覧会でした。人類が環境ということで選択を迫られている滅びかどうか、危機感が感じられます。私たちはすべてにおいて生か滅びかという岐路に立たされています。こういう時代をいやがうえでも歩んでいるということです。そして、増々、地球環境は地球温暖化ということで、愛知万博が展示したマンモスの現実がさらに現実化しているということです。そして、今回の大阪万博は「テーマ：いのち輝く未来社会のデザイン」ということで

した。いのち輝く未来社会のデザインを描き切れず、苦しんでいるという現実を私たちが生きている今の時代です。

現実の重さに潰されていく時代にあって、今日の聖書の箇所は、聞くべき恵みの言葉です。時代の現実の中で、脆くつぶされていきそうになる私たちは一人ではないということです。私と共に生きて下さり、導いてくださる方がおられるということです。詩篇23編にあるように「主はわが牧者」と導いてくださる方がおられる。ヨハネ福音書はイエスさまがまさにその方であると伝えます。イエスさまは、「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言われ、「わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。・・・わたしは羊のために命を捨てる」とも言われます。

「良い羊飼いです」とは、「羊のために命を捨てる」ということです。これはイエス・キリストの十字架の出来事を示しています。イエスさまは私たち一人ひとりが神の前において、生きるために命さえ惜しまなかった。ここに愛があるということです。ヨハネ福音書に「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない15：13」と言われています。良い羊飼いは、この羊に最大の愛をイエスさまは与えてくださったのです。それは今も変わらないということです。なんといい恵みでしょう。私たちは愛のないところを生きているのではなく愛に満たされたところを生きているということです。良い羊飼いですイエス・キリスト、愛の主ご自身であります。イエス・キリストと私たち羊に対する、その関係は、私たちに対する強力な愛にあるのです。イエス・キリストを通して示されことは、「神は愛です」。私たちに入ってくるのは、「神は愛です」というように愛が入ってくるのです。神の愛の中で、脆く崩れてい

く時代、そこで脆く崩されていきそうな私が、今、ここに生きることが許されているのです。

ここで「聞き分ける」、「知っている」というとき、何を聞き分け、知っているかという強力な神の愛に自分が生かされ、育まれているというこの声を聞き分けることです。

「わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。」とあります。「わたしより前」とは……。イエス・キリストを指導者としなさいということ。人間です、人間が人間を導いていくこと、それは「盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりする」ことであるということです。この力は大きい、しかし私たちはこの大きな力を前にしても、これを私の前をいく指導者としなさいということ。私たちは、イエス・キリストのみを私を支え、生かしてくださると指導者として生きるということです。教皇レオ14世は、「世界は一握りの暴君によって荒廃が進んでいる」と語り、「われわれは人類の友愛に満ちた持続可能な道へ決定的な方向転換をしなければならぬ」と訴えました。今こそ「わたしの声を聞き分ける。」という言葉に重いものはありません。それは、愛ご自身のイエス・キリストに導かれている愛のうちにおいて私たちがあるということを知ることが、この本物をも本物として認めない、殺していく社会にあって、私たちは強く正しく生きていける勇気、生き方を示されています。

しばしば、主は、「わたしに従いなさい」といわれました。従うべきは「わたし」、すなわち、「イエス・キリスト」であります。イエス・キリストに私が、私たちが立つ、ここにこそ、今の厳しい時代にあつて、私たちが時代を穿つ力となるのです。

わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

## 牧師室の小窓からのぞいてみると



私は好きになれない経済学者・竹中平蔵氏だが、次の意見には賛同できる。

高市政権に対して、「きちんとした移民法を制定していないこと」だと指摘しています。

「日本は「移民政策はとらない」と建前では言いながら、現実にはなし崩し的に外国人労働者を受け入れています。明確なルールや理念のない受け入れを行っているため、地域社会で摩擦が生じ、外国人に対する不必要な反発ばかりが目立つようになっていきます。現実問題として、日本の経済社会はすでに外国人労働者なしでは回らなくなっています。であれば、きちんとした法的枠組みを作り、正面から受け入れるべきです。一時的な労働者でない場合は、アメリカやドイツなどの先進国では当たり前に行われている「市民権テスト」のような制度を導入し、少なくとも義務教育レベルの知識や語学力、建国の歴史や理念を理解しているかを確認した上で、責任を持って社会に迎える。そうした真っ当な移民制度から逃げ続けている現状は是正されなければなりません。」(集英社オンラインより)



## 園長・瞑想？迷走記

### 1) 多(他)文化の中で

保育園は多(他)文化の中でどう教育、保育と取り組んでいくかということをやんでいます。特に地方に来て、多くのアジア系の外国人を見かけます。そして地域によって、ネパール、フィリピン、ベトナム人・・・と違います。私自身もアジア系の方々の子どもを受け入れています。

私はキリスト教保育にとって、多(他)文化の園児を迎えることは教会の使命だと思っています。

主はうずくまっている人を起こし、従う人を愛される。主は寄留の民を守り、みなし子とやもめを励まされる。詩篇146：9

わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。(マタイによる福音書25章40節)

## 日毎の糧

聖書：わたしには何も欠けることがない。詩編23:1



### ルターの言葉から



「悪魔は信仰者を、内的には恐怖を与えることによって、外的には偽りの教師による策略や、圧倒による暴力などによって苦しめることを決してやめなくて、彼（ダビデ）はここで最後に、この宝（福音）を与えてくださった神が、また彼を終わりまで傍らで守ってくださるように熱心に願う。（『慰めと励ましの言葉 マルティン・ルターによる一日一生』湯川郁子訳 徳善義和監修 教文館）  
わたしには何も欠けることがない。

「わたしには何も欠けることがない。」というわたしは存在するのだろうか。「ダビデの詩」と。編集者は付け加えました。ダビデの生涯は、「わたしには何も欠けることがない。」というより、常に危機と苦難が多い人生だった。（サムエル記上下、列王記上1章、2章）しかし、編集者は、この詩編と出会ったとき、これは「ダビデの詩」というのに相応しいと決断し、表題に加えたのです。

人間の目からすれば、ダビデの生涯は欠けることの多い人生だった。例えば、ダビデとサウロ王の戦いの中でサウロ王の息子友人であったヨナタンを失う。（サムエル下1章）息子らは相憎し殺し合い、これを止められないダビデいた。疑心暗鬼の息子アブサロムは父に反乱し、ダビデの軍隊によって殺される（サムエル記下18章）、彼は得ることは多くあったが、友人を殺し、息子を殺す。愛憎無限（北森嘉蔵氏のサムエル記講解）の人生を送った。しかし、ダビデの人生に隠された神がおられ、多くの欠乏、苦しみあって、神がダビデ（我々）の牧者なることを実感したと編者はみる。神が神としておられるこの信仰に立つゆえに「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。」という事実が信仰者にはみえてくる。

祈り：神よ。私を守り、導いてくださることを信じる信仰にたてるようにしてください。アーメン。

## 甘木通信

まことに、太陽の下に起こるすべてのことを悟ることは、人間にはできない。 コヘレト8：17



久しぶりの私の休みで、87歳になる私の恩師と昼食をした。その時の会話の中で、先生の最近の出来事を通して、牧師とはどういうことかということをお教えられ、襟を正された。それは変哲もない話だが。

先生が遠方の教会の礼拝を頼まれた時、行く電車の切符もお子さんに取っていただき、行くにも不安で行かれたという。自分が出来ないことも多くなり、人に迷惑をかけているのではないかと感じ、いよいよ礼拝の依頼も断る引き際に来たと感じられたという。

しかし、行って、教会の方々が心から牧師の直接のみ言葉の証を待っていることが伝わってきて、自分が出来るかどうかでなく、み言葉を待っている人がいるのだということに気付き、いよいよ依頼を断る時だという自分の思いを変えて、神の御力をいただき最後まで牧師の仕事に忠実であろうと励まされたという趣旨の言葉を話され、感動した。

私たちは相手のことを思って、いろいろと行動するが、神の思いはちがっているのかもしれない。牧師は人を慰めることを使命としているが、逆に慰めを求めている人から慰められ、励まされることをよく知っているのが牧師かもしれない。まことに、太陽の下に起こるすべてのことを悟ることは、人間にはできないということを知ることはこのことに通じるのではないだろうか。

(甘木日記)土) 念願の聖和幼稚園、教会みんなと芝張り。兄弟が和合していることはなんと麗しかな。日) 雨、庭仕事も出来ずに、事務仕事をする。礼拝後、森部牧師を訪問。月) 早朝に東京へ。夜まで会議。火) 久しぶりの休み。恩師と昼食後、病人をお見舞いだったが、都合で会えず。祈り、これからも。夜遅く、久留米着。水) 子どもと保護者の合同の礼拝。保護者総会。市担当者と面談、保育後、職員会。木) 松崎保育園へ。子どもたちに慰めを受ける。キリスト教連盟福岡部会があり留守を任せられ、最後まで。金) やっと幼稚園が終わり、責任から解放。

**おまけ・牧師のぐち**（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。  
はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）今日は、「園庭に芝を敷こう」という集まりで教会の方、呼びかけて応えて下さった方、子ども、大人 20 名近くが集まった。園舎から飛び出し、素足で子どもたちが遊べる空間を作るためである。集う教会、幼稚園（休園中）へ。計算を間違っ、芝が足りず再度、購入、挑戦する。体調が今いちの私は不安で大阪の長男にも来てもらう。私は昼食、豚汁と炊き込みご飯を作る。信徒さんがポテトサラダを作って来て下さる。夢の一

歩。さらに夢をもって、共に歩みたい。  
集う教会、幼稚園。



日）朝は雨、庭の仕事も出来ず、事務作業。礼拝を共に出来き、松崎保育園の保護者、園児、福岡女学院の生徒とお母さんが出席くださる。少しでもキリスト教に触れて頂いたらどうか。お茶の会で女学院の方のお父さんとは教会の方も知り合いが多くこれも良き出会いであった。午後からリハビリ中のM牧師を訪問し、礼拝。聖餐式を手伝っていただけるほど回復された。庭には野バラが咲きだした。月）早朝、5時15分のバスで空港へ。その後、羽村幼稚園の管理者会議へ向かう。20時半の電車に乗り、友人宅に泊まる。いつもお世話になるので土産をもっていくが、辛子明太子を白ご飯につけて私が食べる。火）今日は久しぶりの休みを（野バラ）取



り、恩師と昼食。70歳超えても恩師の前では生徒に変化。励まされ病気も吹き飛び、久しぶりに美味しいと感じて腹いっぱい食べる。孫の通っている幼稚園に行く。寝ているしぐさが父親にそっくりで吹き出す。夜、10時を超えて久留米着。お見舞いに行けなかつ

（土産の千葉の落花生）たT兄は次回に必ず行こうと思う。水）礼拝、保護者会総会、市役所で幼稚園担当者らと面談、帰り、職員会議と続く。晩酌して寝る。木）松崎保育園、午後から日善幼稚園に戻り最後まで。長男に今回の会議の航空券を取ってもらう。金）幼稚園が終わり、解放感、充満。